
おれ×てんせい×てにぶり

椋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おれ×てんせい×てにぷり

【Nコード】

N8714W

【作者名】

椋

【あらすじ】

ぼてぼて歩いてマンホールに落ちたあの日。

気が付けば知らない部屋、出会った知らないオッサンには違う世界に行けって穴に突き落とされるし！

つかこの世界ってあの超有名漫画の世界かよ?! 読んでたの結構前だし内容も覚えてないのに俺にどうしろと?!

そしてぼこぼこ水の中……俺って人生一からやり直し?!

注意!!!このお話の主人公は男の子であり、相手も男の子です。

もしこの時点で無理だなぁ〜と思われましてら引き返してください。
誹謗中傷は受け付けておりませんので、どうか気を悪くなさらないようお願いします。

マンホール×ぶかぶか（前書き）

このお話は完全なる私の妄想なので、どうか優しい気持ちでお立ち寄りください。

マンホール×ぶかぶか

俺の名前は……なんだったかな？

あの夏の終わり、いや……もう秋だったかな？まあ、どっちでも良いんだけど肌寒い日だったと思う。

たまたまコンビ二行こうと散歩がてらぼてぼて歩いてたら……まさかのマンホール落ち。

普通に考えてありえねえし！つても今更どうにもならないけど。

何でも、そこにいたオッサンに聞いた話によると……どっか違う世界の人間が俺のいた世界に来たんで、バランスとってこっちからもあっちに送んなきゃなくなっただらしい。

あーもう、めんど！たまたま仕掛けた穴に俺落ちるって……またこの運の悪さが嫌になるぜ……。

まあ、色々思うところはたーっくさんあるけれども！あのオッサンは容赦なく俺を次の穴に突き落とした。

そして俺は……ぶかぶかぶかぶか水の中。

きつとここ新しい母親の腹の中なんだろうなあ。

しかし、あのオッサン……まあ実際は若かったけど？だってム力つくじゃん、あの男「キースって呼んでね？」とか脳内パニック中の俺に言うんだぜ？しかもちよつとイケメンでチャライし！だからオッサン呼びで十分。

あーそうそう話ずれたけどあのオッサン、確か「行くのはテニスの王子様の世界だから」とか言ってたなあ……ま、よく読む恋愛物とか俺男だし関係ないけど。でもこつちの世界から出て行った子って何しに行ったんだろ？俺がいた世界も、こつちの人から見れば面白い話とか漫画とかの舞台になつてんのかねえ……？

しかし……ひまっ

「もしもし、僕の可愛い子は元気かな？……ねえ紅^{べに}、この赤ん坊用の聴診器は本当にこの子に聞えているのかい？」

……ん？

「あら、大丈夫よ……。ほおら、驚いてお腹を蹴ってるわ」

低い、なんて表現したら伝わるだろう……きつとこんな声を重低音と呼ぶのだろう、と思わせる落ち着いたそれでいて優しげな声が、戸惑いがちに腹にいる俺にもしもし？なんて話しかける。

後から聞こえた声はきつと母親で、気の強そうな、自信に満ちた声で男と話しながら、そおつと腹を撫でていた。

「本当に？さ、触っても」

「良いからほら早く！」

なんだか幸せそうな、楽しそうな、そんな空間の中に俺も存在していることが少し照れくさい気がして、母親の腹……と呼んではいいのか？とりあえず、まあ、わかりやすく壁を一蹴りしてあげた。

「いま、いま……動いた？」

「そりゃあ、生きているんだもの。動きもするわ」

くすくす、と聞える笑い声。

ああ……しあわせだなあゝずーっとここにいられたらいいのになあゝ

そうしたら、難しいこと全部考えなくていいのに……。

ん？なんかココ、さっきより狭くなってるかい？

「うつ……うまれるっんゝっ……わ、わびすけさん救急車ー！」

「ひっ！紅？！ままつまって今」

そして俺は、寿^{いとしぎ} 侘助^{わびすけ}と紅^{べに}の息子、薔薇^{そうび}として無事にこの世へ生を享けた。

が、ここからが大変だった！もう名前からも分かると思うが、両

親の俺への愛情はハンパない！だいたい息子の名前に薔薇って……
この先俺は絶対いじめられるね！！自信を持って言える！言いたかないけど……。

まあでも、うちの両親は俺が悪いことをすればきつと容赦なく叱ることの出来る人たち……と言うより、おもに母親が！ではあるが、父親はとにかく俺の話をじつと聞いてくれる穏やかな人で……。

この先何があるかわかんないけど、でもまあ今は幸せだから、違う世界とかうんぬんは置いておこうと思う！！

マンホール×ぶかぶか（後書き）

誤字脱字などがございましたらご一報お待ちしております。

みーくん×そーくん

あのマンホール事件から五年。

俺は立派に幼児生活を満喫している。

でも誰か……俺を褒めてくれ！だって俺、精神年齢もう二桁いつてんだぜ？まあ今はもう自分で歩けるから大抵の事は自力でやっているけど、生まれた当初は何もかも人任せで……食事も排便も着替えもなあーんにもできない自分に苛立って仕方なかった。そんなんだから多分精神的に安定しなくて、すぐに食事を吐き出したり、腹を壊したりで、何度病院に担ぎ込まれたかわからん。両親には随分心配をかけたと思うし、今もたまに思い悩むと体調を崩すせいで病弱だと思われ続けていて……申し訳なく思う反面、複雑でもある。

「あーあ……」

「どうしたの？そーくん」

「なんでもないよ、みーくん」

ああ、そういえばこんな俺にも友人が出来た。

初めて会ったのは生まれてから数日後、新生児室に新入りとしてみーくんはやってきた。

同じ病院で生まれ、家も隣同士と言う事実これが幼馴染の始まりか……なんて思いながら親同士が挨拶し合っているのを横目で見

ていたのがまるで昨日の事のようにだ。

新生児室でも、俺は先輩だぞ！と生まれたての赤ん坊であるみーくんに威張っては見たものの、所詮赤ん坊だし何の意味もなかったが、今ではちゃんと言葉も通じる。

この先も幼馴染として長い付き合いになるのだからしつかりとどちらが兄貴分なのかはつきりさせておかないとな！

大人気ないとか、プライドはないのか？なんて言葉は、俺の中にいる良心の化身である天使ちゃんに言われ続けもう聞き飽きたさ！たとえ頭脳は二桁でも身体は五歳なんだ！好きにさせてくれ！！

何より、俺の中の悪魔ちゃんが囁いているんだ……みーくんはきつと将来なにか素晴らしいことを成し遂げるに違いない！それなのに自分はどうだ？みーくんが素晴らしい青年に成長した頃、お前は身体は青年でも中身は中年じゃねーか！？そんなじゃお前、幼馴染にも捨てられるぞ？と。

「……ねえ、そーくん？ぼくとあそぶの、たのしくなあい？」

ん？みーくんは本当に可愛いなあ……男の子だったのにどうしてこんなキラキラして見えんのかな？これがオーラって言うやつ？

やつぱ血筋かね？実は、みーくんの家族は全員が美形だ！自慢じゃないが、爺様はこれぞダンディだし！父親は草食系な美青年、母親は童顔で天然の可愛い系美少女だし！！

まあ俺の家族も中々の顔ぶれだと思うけど……どうなんかね？

「もういいっそーくんなんてっ……そーくんなんてっ」

まずい！！緊急事態だ！！

「あゝみーくんみーくん？ちがうんだ」

「なにが……」

「えっと……。みーくんとあそぶのがたのしくないわけじゃなくて……」

ああ、みーくんが泣きそうだ。あふれ出る涙が、ただでさえ大きな瞳を零れ落ちるんじゃないかと錯覚させる。

「そうじゃなくて……」

いつも思う、こういう時……俺はいったいどうすれば良いのか

「なかないで……みーくん」

みーくんは可愛い。栗色の綺麗な髪に、真っ白い肌、まるで天使みたいなんだ。

それに頭も良い。まだ小さいのに、図鑑とか幼児用の絵本も何冊も読んで……本ばかり読んで外で遊ばないから白いのか？まあ良いさ、とにかく！可愛いんだ！！可愛すぎる！！

実を言うと、新生児室で出会って以来……ずっと片思いしている。

まあ……赤ん坊に？とか、相手は男だぞ？とか、考えなかったわけじゃない。でも、そんなことは正直もうどうでもいいと思うこと

にした。

なんでかって？そんなの、限がないからだ。だってそうだろう？あの優しくも厳しい親はどんなふうに俺を見るだろう……とか、みーくんに嫌われるだろうなあ……とか。そんなこといちいち考えて悩んで苦しめて言うのか？これからずうっと……俺の人生これから先長いのに！唯でさえ前の世界から落とされてほんのちよつとは傷ついてんだぜ？

新しい世界に、新しい俺、なら趣味嗜好も新しく変わって何が悪い？！前は女の子が好きだった俺が、みーくんを好きな自分に生まれ変わっただけじゃないか？！それに生まれてそうそう運命の相手がすぐ隣にいるんだぜ？最高じゃん？

これから先、自分からこの想いを言葉にする機会は来なくても……それでもそばにいるための努力はするつもりだし。

「うつつ、ひつく……」

「みーくん……ごめんね。おれ、ちよつとかんがえごとしてた」

「ぼくつついるのがっ、ひつく、たのしくっ、ないからあ？」

「ちが、ちがうよ。……どうすれば、みーくんとずうっといっしょにいられるかなって、かんがえてたんだ」

「ぼつぼくと？」

みーくんはそんなこと？って顔で、驚いて涙ももう止まったみたいだ。

「うん、みーくんと」

「ぼくも、そーくとずうつといつしよにいたいなあ……」

そう言うてにつこりと笑ったみーくんの目尻から、残っていた涙の粒がぼろり……と落ちたので、なんだかもつたいないような気がして、ふと、手を伸ばした

「あ、」

結局、落ちた涙をどうしたかったのかは、自分でも分からないけど……。伸ばした自分の小さな手は、今更引き返すことも出来なかったので、涙と鼻水で汚れても可愛いみーくんの顔を綺麗に拭いておいた。

「ありがとう、そーくん。ぼく、そーくんだいすき！」

「……ありがとう。おれも、おれもだよ……みーくん」

複雑過ぎて、果たして俺は、だいすきよりあいしている……。みーくんの前で、ちゃんと笑えていただろうか？精神年齢二桁の自分がこんな風に恋をして、こんな風に翻弄されるなんて、まさかまさか……。俺を突き落としたオッサンも予想すらしていなかったに違いない。

そしてまた、ティータイムで世間話に花を咲かせつつ、俺たちの行動を幼児の微笑ましい光景としか捉えていない母親達も、想像もつきはしないだろう。

でも、誰かを傷つけると理解していても、他の誰でもない、みーくんに恋をした事実を否定されたくないと思う。新生児の時に出会って、いろんな面も見てきたし、これから先の方が長いぶん嫌なと

ころもいーっぱい出てくるだろうけど、それでも……運命だと思っ
たんだ、他に代わる人はいない。だから、友達でも、幼馴染でも、
何でもいいから、繋がっていたいと思うんだ。

眼鏡×受験

あの赤裸々告白からさらに六年が過ぎ、俺たちは十一歳になった。

変わったことと言えば、俺が前よりずっとミーを大好きになったこと……そして俺の敵が増えたことだろうなあ。

ちなみに、今の俺は自宅から徒歩三十分ほどのスポーツクラブの前にいて、ミーが出てくるのをのんびりと設置されたベンチに座って待っている。

「みーくんやーい、早く出てこー」

「……ソウ、こんな時間になぜこんな所にいる？」

ああ、これがあの可愛かったみーくんだなんて酷すぎる！……でも好きだあ！！と叫べたらどんなにスッキリするか。

みーくんと俺は小学校高学年になり、図書館に通い詰めていた彼は視力の低下により眼鏡をかけた。背も随分伸びて、少しくせのある茶色系の柔らかそうな髪は男の子らしく短髪に。そして、そしてみーくんは呼び方まで変更を要求してきた！俺は、例え外見が激変したとしても、やっぱり可愛いことに変わりはないみーくんに嫌だとは言い出せずに、それでもまあ、みー君宅の爺様のお部屋をお借りして！正座の上膝を突き合わせての長時間のお話合いと言うものを行いまして……。

俺は、そーくんからソウに。みーくんはミーに変わったわけだ。

「ミィ、もう終わった？帰れる？」

「ああ、クラブは終わったが……迎えに来てくれたのか？」

「ん。まあ、話したいこともあったし」

「話し？そうか、なら歩きながら聞こう」

……ああ、みーくん。なぜに君は、幼馴染相手に美中年のような話し方すんの？ギャグ？

「……ん。あさ、ミィは中学どこ行くの？」

俺、実はテニスの王子様？あんま知らないんだよね。生まれ変わってから言うことじゃないんだけどさ……主人公はさすがに知っているけど。

「ああ、もうそんな時期か。だが、ソウならどこでも受かると思うのだが？」

「んー、だから！ミィはどこ行くのか聞いてんだろ」

本当に！なんで中も外も美中年なくせにこんな鈍いんだよ？

「何故そんなことを聞く必要がある」

「何故って……聞いちゃダメか？」

受験するなら先に受ける学校決めとかないと対策も立てられねえし……

「まさかとは思いが、俺の志望校を聞いて、同じところに行こうなどと考えているわけではないだろうな？」

「んゝそんなことはない！俺は純粋に！あゝ参考として聞いているだけ」

まずい、物凄い疑いの籠った視線を右隣から感じる……。

「まあ、ソウが言うなら……信じよう。俺は、青春学園へ行くつもりだ」

「せーしゅん学園？……へえ」

せーしゅんって……聖春、とかって書くのかな？まさか青春じゃないよな！？え？まさか？

「せーしゅんって、青い春って書く？」

「学校で説明を受けたらう？また居眠りでもしていたのか？」

「え？まさか！いやいや、一応確認だつて」

小学校に入学してからというものの、退屈な授業に飽きてサボったり居眠りをしたり、まあ授業に支障が出ないように気を付けてはいたが、ミーはいつもそんな俺を呆れることなく叱ってくれていた。

あゝあでもやっぱり青春学園なんだ……。俺、精神年齢的にはもう二十代後半なんだけど……青春、出来るかな？

それにしても、五年前はこの分じゃ有名な漫画の世界だろうと何だろうと、自分には全く関わりなさそうだと思ってたんだが……まさか生まれた時から一緒にいたミーが原作キャラその者だったとは。衝撃的事実が発覚したのは五年前の小学校の入学式当日、緊張や興奮を隠せていない他の新入生たちと一緒に真新しい教室で式の始まりを告げる先生の登場を待っていた時だった。

「あゝ手塚君、手塚国光君？新入生代表の事でお話があるから少し廊下に出てもらっても良いかな？」

ガラツと戸の引かれる音と共に顔を出したスーツ姿の先生は、俺の隣に座っていたいつも通りの可愛いミー君に向かってそう言い放った。

え？……主人公くらいしかちゃんと覚えているキャラなんていない！とはつきり言い切れるさすがの俺でも名前くらいは覚えていた。まあ、他のキャラも実際に聞いたたり、見たりすれば思い出すかもしれないけど……今は無理だ。今はそれより！手塚？！俺のみーくんが？

正直新生児室からの付き合いだからほとんど何でも知っているつもりだったけど、そういえば名前だけはまだ口が回らない頃に親が覚えやすいようにと略称してそのまま疑いもなく呼んでいたから……

…致命的ミス！

それから暫らくして、なんの影響か知らないがみーくんはテニススクールに通いだした。

みーくんの本名は、手塚国光。

母親が、国光の国は手塚家の男連中全員の名前に含まれているから呼ぶときに困らないようにと、光^{みつ}の方で呼ぶようになり、仲良しママーズのお話を横で聞いていた俺がそれが名前だと勘違いして覚える、と言う痛恨のミスだった。

まあ、ミーが誰だろうと俺の愛は変わらなかったので問題はないがな！！

眼鏡×受験（後書き）

遂に相手の名前がでてしまいました！

皆様の好みもあるとは思われますが、どうか優しく広い心で楽しんで下さいませ。

意外×俺の怒り

さて、またまたあれから二年が経過した。

俺もミーも中学一年になり、もちろん入学式なんてものも体験したわけだが！俺は天使を見たね！

ミーは入学試験で主席を取り、（俺は一応五位以内だった）そして新入生代表を務めあげたわけだが！学生服姿がこれまた可愛いなのって！！

「まあ、悲しいかな独り占めは出来ないが」

こうして毎日眺められれば今は十分か？

「ん？ソウ、何か好物でもあったか」

「いーや別に。……好物ねえ」

俺の好物なら目の前にいらっしやいますか？何か？と言えない自分にはヘタレ、なのだろうか？

「ふふっそれにしても、2人は本当に仲が良いよね」

にここに、と1スマイルぴー十万くらいしそうな少年、不二君は俺らにほほ笑む

ヤメテー!! 邪なこと考えて本当にごめんなさい!……全く、清らかな仏様のような神々しいほほ笑みだぜ!!

「不二、この二人は産院も同じ、家も隣同士の上、家族ぐるみのお付き合いをしている仲だ。まあ所謂幼馴染と言つものだな」

この、ノート片手に他人様の個人情報勝手に語るのは 乾君

「へえ、それならお互い知らないことなんてないんじゃないか」

「そうだにや、うらやましいにや」

穏やかーにお話合いに参戦するのは、子猫さんのお世話係もとい大石君

そして今このメンバーの中じゃ一番世話のかかる猫息子こと 菊丸君

この個性豊かなメンバーで何をしているか? それはだね、俺たちは今 青春学園中等部屋上にて楽しく昼食中なわけだ。

「それにしても、この中でテニス部じゃないのって俺だけだよな? もう入部届出したんだろ?」

「ああ、部活動見学の初日に提出したからもう受理された」

「寿は、何部?」

そう不二に聞かれた俺は、とっても意外がられるだろうなあと思
いながらも

「俺は、演劇部」

「……え？／は？」

「だから、演劇部だって」

これはミーにもまだ言っていなかったから、やっぱり驚いてるな

「聞いていないが……」

「まあ、最初は何でもいいかなって思ってたんだけどさ」

「思ってたんだけど？」

乾君がノート片手に迫ってくる

「いや、皆が毎日汗水たらして青春してるのを見てたら……俺も
何かしてみようかなあと」

「ほう」

「……もう、入部届は提出したのか？」

「ん、男手が少ないとかで結構喜ばれたけど」

「そうか……」

あゝやっぱ相談してからにするべきだったかな？こりゃ拗ねてるなあ

「なあ、俺これでも入部早々期待の新人って部内では囁かれてるんだ。だから、練習見に来いよな」

「だが、俺も部活が」

「時間が空いたらで良い。皆も暇だったらな」

「うん／ああ」

「時間が空いたらな」

まったく、頑固だなあ……。そんなところも嫌いじゃないけど！

「はあ、はあっクソッ……」

そんな話をした数日後の事だった。

ミーが利き腕を怪我をしたと聞いたのは……。

正確には、テニス部で三年生と一年の妙に落ち着いた奴が試合をしている　と言う話で……気になったのは、その一年が右腕で試合をしている　と話している女生徒の声を聞いてからだ。

まさか、ミーは左利きだし、それにあいつは自分から問題を起こしたりするような人間じゃないのは長い付き合いの俺が一番良く知ってる……それは分かっているのになんでか妙に落ち着かない。

「先輩、すいません。ちょっと抜けても良いっすか？すぐに戻るんで」

「え？……ええ、良いわよ。幼馴染の君でしよう？おさななじみのきみなんだかさつきから落ち着かないものね」

「すみません」

「今日はもう終わりにしようと思ってたし、ちょうど良いわ。そのまま直帰ね！」

この先輩は演劇部部長の冴木女史　強く逞しく美しく優しい先輩で、とても頼りになる。

実際、ミーの事も名前は伏せて片思いの相談もしているがその話にも動じずに一言「ふうん、演劇に支障がなければ問題ないよ」だったしなあ

よし、行くか。

「じゃあ、おつかれっす」

「じゃーねえー」

そう言葉を交わして、部屋を出た俺の耳に入ってきたのは

「ねえ、聞いた？ほら、テニス部の手塚君と三年の試合、話が拗れて言い合いしてるって」

は？

「ああ、外の騒ぎってそれ？」

騒ぎ？

「はあはあっミーン！」

ガッシャン！！俺は人でごった返したテニス部を囲っているフェンスを走ってきた勢いのまま思い切り掴んだ。

「どけっ！通せよ！！！」

入り口は!?

「寿!こつちだ」

おろおろした大石が大きく手を振って俺を呼ぶ

「大石君!ミー、手塚は!?!」

俺は急いで開けられた入り口から中に入り大石君に掴みかかった

「試合は終わったんだけど、あそこで先輩と」

そういつて指示した方向を見れば、ミーの柔らかそうな茶色の髪さしめが一回り大きい三年生と向かい合い何か騒動になっているのは間違いない。

「ミ」

バンッ

「……なに、なんだ」

ミーと呼んで駆け寄ろうとしたら、大きな何かを叩くような音が響いた

「みー?……ミー!?!」

ミーが見えない何でだ?なんで……

「おいっそこ避けるよっ！ミィ？どうした、その手！？」

ミィの左手が……

ふと、向かいに目をやれば三年が茫然と立っている

「……てめえか？なあ、そのラケットでミィの利き手を殴ったつて言うのか？お前っそれでもテニスプレーヤーかよ！！ふざけんなっ」

かあつと頭に血が上って、どうしても許せなかった。

だってそうだろう、きつとおれの予想ではミィが利き手とは逆の手で試合をしてしかもこの先輩に勝ったんだろう。だから、この人だけが悪いわけじゃない！ミィも悪い！でも、この人だってスポーツマンが利き手を使えなくなる　と言うことがいったいどういう意味を持つのか分かっているはずだ。

そしてなにより、この人はミィを殴るのにラケットを使った。

「そのラケットは、テニスを続ける限りあんたのパートナーだろう！そのラケットで！よりもよってミィを殴りやがってつぶっ飛ばしてやる！！」

「止めるんだ、寿！！手塚！寿がっ」

「ソウ……？」

外野の生徒はざわざわうるせーし、大石君や不二君たちも俺を止めようと腕や胴体に抱き着くがこれぞ火事場の馬鹿力！！そのままたの三年に殴りかかり、ぼっこぼこにしてしまった……。

あの子の事は良く覚えていないが、不二君たち話を聞くと……。

俺はあの三年と周りでそいつを離し立てていたお馬鹿どもをフルボッコにした上、止めようとした不二君たちを振り切り、蹲ったままだったミーをお姫様抱っこして保健室へ運び入れ、騒ぎを聞きつけた先生に呼び出されたまま停学をくらい、迎えに来た親を見た瞬間、バタンっとならしたらしい。

ところ変わって気が付けば、自室のベッドの上

あゝこれはまずい。

俺生まれ変わってからこんなに怒ったことなかったし、倒れると興奮しすぎたかなあ？

ミーにも悪いことしたなあ、きっと驚いただろうなあ

「けが、ひどくなきゃいいけど……」

しかし、疲れたなあゝ。

ま、今更なに言っただって状況がかわるわけじゃねえし……今はゆ

じっくり休むこと専念させてもらうか。

意外×俺の怒り（後書き）

おかしなところがあればご一報ください。

……出来れば易しめにお願ひします（苦笑）

父の愛と子供な俺＋強敵！手塚家の男達（前書き）

今回ミイ君は全く出て来ませんが、次回は一対一でお話し合いをする予定です。

父の愛と子供な俺＋強敵！手塚家の男達

少し眠るつもりが、目を覚ますともう翌日で、カーテンの隙間から朝日が差し込んでいた。

「ふうあ」

……昨日家で目覚めたのが夕方だから、えー今は朝の五時でその前に倒れてたのも入れたら、うえ？もう十時間以上寝てるのかよ！？

「ああゝ、母さん怒るだろーなあ。……でもまずは父さんの書斎からか」

とりあえず、学校の事は置いといても良いとしよう。だが！家庭内の問題は別だ！特に母さんが！だけど。

「何着ようかなあ……って、学校ない日は面倒だなあゝ」

「ごそごそ筆筒をかき回し寝癖を撫でまわしながら、どうやって両親に説明すべきか脳内はフル回転だ。

ミーの持ち出しわけにもいかないしなあゝ。

「ようし！前にミーがそれとなく褒めてくれた白のロンTに、ミーの髪と同じ栗色のカーデと黒系のジーパンで行くぜ」

とんとんとん 音を立てながら朝方でまだ少し肌寒い階段を下りる。

そして一階の一番奥にあるドアの前に立ち、深呼吸

「すーはあーすうっ」

ばあん！！

「うわあ！！？ごほっげほっ」

いきなりドアは開かれ、母さんが飛び出してきた。
深呼吸の途中だった俺はむせるむせる！！

「あらっ薔薇^{そうび}目が覚めたのね！身体は何ともない？朝ご飯なら今から作るから少し待っててね」

俺んちの母親は怒ると、結構と言うよりもっと凄く怖いはず、でもなぜか見た限り怒っていないようだ……。

普段の事まで紹介するなら、マイペースで天然も少し入っているので別の意味で恐ろしいことを仕出かしたりもするが、被害は今のところ俺や父さんに留まっているので問題はあがあるが寿家の家訓で無いことになっている。

今現在も進行形で俺は涙目のままむせているが、母の眼には映っていないようで、ドアを開けた勢いのまま楽しそうにキッチンへとスキップで行ってしまった……。

「ん？」

きいっとドアの蝶番が軋む音がして、父が顔を出す

「まったく、紅は何度言ってもドアを静かに開けられないのはなんでだろうねえ？またドアを直さないと……。おっと、薔薇起きたのかい？」

「ごほっぐっ」

「ああ、良いよ喋らなくて。また紅にしてやられたのかい？君も懲りないなあ」

そう言いながら背中を撫でってくれる父さん。

「朝食が出来るまでにはまだかかりそうだ。書斎へお入り」

「ぐっ……うん」

俺、何しに来たんだ？

「さあ飲みなさい、少しはましになるはずだ」

書斎のソファへ向い合せに腰掛けて、父さんはミニ冷蔵庫からミネラルウォーターを出してくれた。

「……ぶはあ、ありがとう。生き返ったよ……？」

それを受け取ってがぶがぶと飲み干し、顔を向けると、父さんがにこにこ俺を眺めていることに気が付いた。

「な」

「紅は何も言わなかったろう？」

なに？と聞こうとしたとたんにこれだ

「……」

「昨日の事は大体、君の友人たちが説明してくれたよ。だから、僕らが叱ることは一つもない。むしろ、さすが僕らの息子だと紅はとても褒めていたよ」

そうゆつたりと俺に語りかける父さん。

「叱ってくれないのかよ」

「叱ってほしいのかい？」

おかしな話だ、と俺は思う。だって学校で問題を起こした一人息子を褒める親って……

「……なら、二つだけ」

そう父さんはへにやんと眉を下げて俺を見た

「僕は、誰が見ても分かると思っけど喧嘩向きじゃないからね。自分の拳を誰かへ向けたことも、向けられたこともないから、人にどうこう言える立場じゃない。だから、これは説教とかじゃなくて僕の勝手なお願ひなんだけど……」

そう前置きして

「……正直、傷つかないでほしい。生きている限りそんなことは無理だとも、子供の成長には必要なことだとも、理解してはいるんだけど……そう願わずにはいられないよ。……君が他人へ拳を向けたんだから、よほど怒っていたんだろうとは思っけれど、人へ暴力を振るえば、必ず自分にもかえってくる。目の前でボロボロの君が倒れた時、心臓が止まるかと……本当にそれくらい驚いたんだ。……女々しい父親だと思うだろう？ けれど、僕たち夫婦にとって君が……寿 薔薇と言う子供がどれほど大切に、どれほど愛しているかを忘れないでほしい」

……ああ、もう！ 何時もそうだ。父さんは何時だって、何が起きても家族を責めない疑わない怒らない。この人は、俺たちに何かを伝えるとき、悩んで、何度も言葉に詰まり、言葉を選びながら、自分の子供へだって真剣にお願いをするような人だ。

俺も精神的にはもう成人しているからわかる。こんな風に人に対して接するのは、言葉に出来ないほど大変で！大変で！大変だつてだから何時も、大切にされていると感じて、湧き上がる暖かい気持ちや、この世界で得た父親への尊敬や誇らしい気持ちをどうしたら良いのか……中年と少年の間にいる俺の精神はむず痒くなる。

……なんだこの心の痒さは！？嬉しいさ！嬉しいけれども！照れるわー！！

みたいな……。ははっ

「う、うん。おれも…父さんと母さんの事好きだよ」

うわぁ……間がもたねえ

「それで！…二個目は？」

自分で言つて感傷に浸っている父さんは涙目のまま、

「ん、ああ……二つ目は」

何で俺は自分の父親との会話でここまで汗かかにやらんのだ！

「昨日の夜に、手塚さんのご両親がお話をしに来られて……みつ君の腕の怪我が」

「えっ！？」

なんだ！？腕の怪我はどうなったんだ！？そんなに酷いのか？

「落ち着いて聞きなさい。……治療に時間がかかるようなんだ」

先ほどとは違い、珍しく真面目な顔をした父さんは、そう告げた。

「時間……」

俺の頭の中は真っ白で、どうしてもっと早く駆けつけなかったのか、とか、演劇部に入ってる場合じゃねえーし！とかそんなことをごちゃごちゃと脳内で

「薔薇！」

はっと、父さんの厳しい視線

「良いかい？これは君のせいじゃない、手塚さんもそう仰ってたよ。むしろ君のおかげで、早く治療が出来る」

「二人ともご飯でき」

「でもっ！でもミーは！ミーは怪我した！！」

その時、母さんががちゃりとドアを開けたけど、俺は気づかないふりをした。だって、今の俺は15歳のただの餓鬼だ……感情が、抑えられない時だって

「ミーは怪我しただろっ！？怪我してっそれでっす！できなくなったらっおれっおれはたすけられた！！まにあっただっ！！」

敬神年齢が何歳だろうと、今は関係なかった。

大切な人が怪我をして、その人が何よりも大事にしているモノを

俺が守ってやれないまま失わせてしまったんだと、そう思うだけで、涙がぼろぼろと零れ落ちて……

「まにあつたのにつみーがつ……」

「薔薇……」

「……光君^{みつ}は大丈夫よ。あの子はこんなことで立ち止まったりしないわ、ねえ薔薇？あなた、こんなところで泣いている暇があるなら早くご飯食べて光君の所へ行つてきなさい。ほんと、あんたたちはいっつも自分の事よりお互いの事ばかり心配して……」

はあ、と母さんはため息を吐くと俺の頭を一撫で……ではなく一殴りした。

「いっ！……痛いつ」

母は強し！俺には、感傷に浸ることも許されないと云うのか……？なんて脳の半分で一人芝居しながら、もう半分で母さんに言われたことを理解しようと脳内ぐるぐるしながら、涙を止めた。

「侘助^{わじすけ}さん、朝食出来たわよ？薔薇も、は・や・く 席へ座りなさいね？」

こえーよ……。

「うん、じゃあ先に行っているよ」

父さんは何もなかったかのようににつこり微笑んで書斎を出て廊下へ消えて行き、母さんもそれに続いたので俺は一人。

「あゝなんか、今むしょーにミーに会いたい……」

あれから母さんに言われた通り朝食を終えた俺は、隣に建つ立派な手塚家へと足を向けた。

「よし、押すぞ？押すからな？」

誰もいないのに、チャイムを押すことにビビるあまりぶつぶつぶやき続ける俺一人。

「よし、もう押すぞ。よ」

「……なにをしている？」

ひっ……っ てじじさまじゃなか！はあゝ

「じじさま、驚かさないで下さいよ。絶対、今で俺の寿命縮ま
った！」

「何を言っておるんだ馬鹿者。国光に会いに来たのだろう？さっ

さと上がらんか」

「いやいやいや！俺ここで良い！ここで良いから」

ミーの爺様は顔の割に融通が利く。まあ、年の功ってやつかなあ？同じ顔していても爺様とミーパパとミーじゃ全然違うもんなあゝなあんで、ぽーっとしながら爺様に家に上がるのをお断りすると

「何を今更、普段は遠慮の言葉など知らん悪がきのようにズカズカと上り込むお前が……む。馬鹿孫の怪我の事を気にしているなら」

眉間に皺を寄せながら背中を押す爺様と、玄関のドア枠に？まり意地でも離さないと必死な俺。

「おや、お父さんどうしたんですか？ん？ああ、薔薇くんかあ」

まずい！強敵ミーパパが現れた。

「どうしたんだい？丁度今、お父さんが朝の散歩から帰ったらお茶にしようと彩菜と話していたんだよ。薔薇くんの好きなお饅頭もあるから食べて行きなさい」

……ぼわわんとしたこの人の空気に惑わされること十数年。俺の父さんと空気は似てるんだけど……やっぱり手塚の人だからなくこれでもエリートだし！ん、よしここは！

「……はい、じゃあ少しお邪魔します」

ははっ、俺だって前の世界ではちゃんと大人の付き合いとかしてたんだけどなあ、それでもこの世界の大人には勝てる気がしねえわ

父の愛と子供な俺＋強敵！手塚家の男達（後書き）

主人公の父の溢れんばかりの愛情と、母の痛い優しさが伝わればなあ～と思います（笑）

ちなみに、ミー君ご家族について実はあまり詳しく存じ上げないので何が間違っていたらそつとご一報下さいませ。

肩身せまつ × 急展開

流されやすい今どきの若者のように、あの状況で逃げられるわけもない俺は今……。

「爺様、俺やつぱ」

爺様の部屋、すなわち和室で手塚家の大人に囲まれお茶をする俺一人。

帰りたい、と言おうとしたものの

「ふむ、彩菜さん」

「はい、何ですか？お父さま」

「お茶のお代わりを貰えるかね？」

「お父さん、飲み過ぎは良くないですよ」

「あら、貴方だってもう湯吞がカラですよ？」

……隙がねえ！！俺にどうしろと！？

だいたい、こんなに饅頭出されてもなあ……。俺の家は手塚家みたいに朝五時起きとか極端に朝早くないから、さつき食べた朝食まだ消化しきれないし、もう腹がパンパンだ！

「……」

げぶっ……もうどんなに勧められても食べられねえ。

「ごっほん！ーんっ」

「あら、あらあら？」

「ああ、そうだね」

……え！？なに！今の何の合図？！

爺様の咳払いを合図に、ミーパパ、ミーママはアイコンタクトを始め、そして

「ソウ君、光は今日学校をお休みしたのだけど……まだ部屋から出てこないのよ」

「うむ」

「それで、君に様子を見るついでに朝食を届けて貰いたいんだ。君も今日は休みだし、時間はあるんだろう？お願いできるよね？」

ミーママが心配そうに、ミーがいるであろう二階を見上げそう口にする、爺様は相槌をうち、ミーパパはお願いと言つ名の脅しをかけてきた。

「……はい、行きます」

俺、俺って……？

朝食の載ったプレートを両手に持ち、なるべくゆっくり階段を上り、ついに来ました。

「はあ、どうしょ」

目の前にはミーの部屋のドアが。

「逃げ……いやいやそれはまずいだろう？でもなあ」

ぶつぶつぶつぶつ、俺は何時からこんなに根性のない男になってしまったのだろうか？

「……ソウ、そこに、いるのか？」

そんな時にドアの向こうからミーの声が！！

「えっ！？あっああ、俺はここにいて！じゃなくて、あゝ昨日の事だけど」

まだ心の準備もすんでねえし……何から話せば！？まったく、爺さんもミーパーパもミーも図ったかのようなタイミングだな。

「待て！何も言つな、それから動くな、ドアも開けるな」

ええー！！？それって入ってくるなってこと？！顔も見たくない
ってこと？！！俺！！俺嫌われた？！！

「……っミー？」

「話したいことがある」

そう言つた声は妙に余所余所しい、何より目の前のドア一枚から
放たれる緊張感と言つたら……

「昨日の事だが、騒動に巻き込んで悪かつた。その上、停学にな
つたらしいな……本当にすまない」

いやいや、全然気にしてないし！俺の親なんてよくやつたって褒
めてたし！！

大声でそう叫んでこの空気を何とか吹き飛ばしたい俺一人……勿
論、ミーが一生懸命何かを話してくれている今そんな無粋な真似は
できないわけだが。

「ソウに保健室へ運ばれてから応急処置を施され、専門の病院へ
行つたが……医者から、もし治療が遅れていたらもうテニスは出来
なかったかもしれないと聞いて、正直目の前が真っ黒に塗りつぶさ
れたようだった」

聞いているこっちが暗くなる声でミーは続けた

「俺は、甘く見ていたのかもしれない。ソウは良く言っていたな、
運動部へ入るなら、テニスクラブよりずっと上下関係には注意した

方が良いと。だが俺は、同じテニス部の者同士なら、試合をすれば分かり合えると思っていた。スポーツマンなら、試合中の怪我にはお互い十分気を付けていたし、それ以外で暴力沙汰になるとは思ってもいなかった。……俺は」

「……なあミー、俺たち、まだ十二歳なんだけど？分かんないこととか、嫌でもこれから覚える事なんて一杯あるんだ。だから、今からそんなふうにな人で悩む必要はないと思うんだけどなあ。」

深刻そうに、苦しそうに、ミーが吐き出すものだから……ついおどけたように口から出ていく言葉たち

「ミーは元々、口下手だし、きつと少し話ただけの相手には勘違いされることもあるだろうけど……それはこれからの努力次第でいくらでも改善出来るしさ！それに、身内贔屓じゃないけど、ミーが今回の引き金じゃないことはきつと大体の人が理解してくれていると思う」

「……だが、今回の事でテニス部にも、お前にも、迷惑をかけた」

……はあ、俺がこれだけ言ってもまだ言うか！？俺の事はもう良いつてのに！

そつ　と部屋のドアに手を触れて

「……なあ、お前さ、俺をなんだと思ってるの？ただの隣人？同じ産院で生まれただけの幼馴染？それ以下の友達？俺はさあ……俺は」

大事に、大事に守ってきた俺の幼馴染兼片思い人。
誰よりも、それこそ親より想ってきたのに……俺達って、こんな

ドア一枚に遮られるような関係だったっけ？

「……分からない。あの時、ソウが、先輩へ殴りかかった時、まるで別人のようだった。そして、逆にお前が殴られているのを見て、自分も凄く傷ついたように感じた」

えっ??何それ?!本当に!!?自分から聞いておいておかしいけど、えっ??予想外な展開!!傷ついたって怪我してたからじゃないくて?!

「……」

こういう時何言えば……あゝ恋愛経験値低くてわかんねえ!!!

恋愛初心者×頑張る俺

俺は無言のまま、ずるりとドアを背に座り込んだ。

情けない。好きな相手を前にしているわけでもないし、だいたいにしても見える位置にもいねえのに。でも、ここはミーの家なわけで

……

「ソウ？……おい、聞いているのか」

とんつとドア越しにミーが触れているのだとわかる。

「んあ、ああ……。ちゃんと、聞いている」

ミーは不安そうな声で俺を呼ぶ。その心細そうなを聞くとなぜか、小さな頃の泣き虫ミーくんを思い出して、緊張が解けたせいか、ふと笑えてきて、少し安心した。

いつからか、ミーくんはあのぷっくりとしたまあるいピンクのほっぺも凛々しくなっていて、いつだって零れ落ちそうに潤んでいた大きな瞳はこれまた大きな眼鏡に邪魔されて簡単には見れなくなっていて、小さくてころころしていたのに背が伸びて、くるんつと艶々だった天使の輪が浮かぶ大好きな髪は日に焼けて少し傷んで、ああ……そうだ俺とずっと一緒にいるって約束したのに、ミーはテニスに恋をしたんだっけ。

「ソウ、怒っているのか？」

まあた、始まった。

「怒ってねえよ、俺がミーに怒ったこと、あったか？」

「……そう言えば、俺はソウが怒ったところを見たこともなかった。先輩に殴りかかっているのを見た時、あの時」

そう言葉を区切ったミーは一呼吸おいて

「……不二や大石たちにソウを止めてくれ、と頼まれても体が言うことを聞かないんだ。まるで、お前は知らない他人のようで……お前も怪我をしたのだろう？ 昼に、演劇部に入部したと聞いた時も、嫌な顔をして、お前を困らせた。本当に、すまない」

……ここは、ミーの家で、一階には爺様もミーパパもミーママもいる。けど、俺をここに連れてきたってことは、まあ、多分、少々手荒なまねをしても許されるよな？

「なあ、ミー？ おまえさあ、そういう気持ちを、なんていうか知ってる？」

俺はことさらゆっくり、そしてささやくようにつぶやいた。

「そういう、気持ち」

ミーは息を吐き出すように小さな声で、子供のように言葉をなぞる。

「そ。たとえば、俺が殴られてるのに、お前も痛いと思う理由。たとえば、俺の知らない一面を見て、体が動かなくなる理由」

「……」

……。

俺は、辛抱強く待った。

こればかりは、本人が気づくことだし、例え世界中の人がそれは例のあれだよ！とミーに言っても、本人が友情だというなら、それは一生友情でしかないのだ。

……だから、俺は待った。

「……っ」

ドアの向こうから、呻くような、なんだか表現しがたい声が聞こえてきたのは、もうすっかりお昼も過ぎて、すっかり忘れていたけどミーに持ってきた朝ごはんのプレートも萎びた頃だった。

恋愛初心者×頑張る俺（後書き）

誤字脱字だけじゃなく、感想もお待ちしております!!

涙のミィ×心配な俺の首（前書き）

短いです。そして、まだじれじれしてます？（笑）

涙のミー×心配な俺の首

かちやり、今まで固く閉じていたその天岩戸あまのいわとは、小さな小さな音を立てて、開かれた。

「っ……」

俺は、背にしていた扉を奪われ……それでも、振り返るような無粋な真似はしない。

「ソウ、お前は知っているのか？この、良く分からないものの、答えを？」

「……」

ミーは俺の背後に立ち、心細そうな声で、その答えを求めている。

「お前が傷つければ、俺も同じように痛みを感じる理由。お前の知らない一面を知って、知って……こんなにも、こんなにも心が揺れる理由。俺は、俺は知らない……こんな気持ちを、俺は知らない！」

がたつ、と音がして、ミーは膝をつき……額を俺の背に伏せて荒い息を整えようとして深く息を吸い、そして静かに、泣いていた。

「……みー、泣くなよ。お前は今、凄く混乱してるんだ。だから、

別に、今答えを出さなきゃいけないわけじゃないんだし、なあ……
頼むから泣くなよ」

やっぱり、こういうことに人一倍疎いミーには早すぎたのかもしれない。こんな風に、苦しそうに、辛そうに泣かせたくて待っていたわけじゃない。俺は別に、ミーを苦しめるくらいなら一生幼馴染でも構わないんだ。

「なあ、みー……俺さあ」

「つく、ちが……違う。そうじゃないっ」

ミーは、静かに泣いていた。俺は、もういい　と言いたくて声をかけたのにそのか細い声に遮られて

「お前はっ、何時もそうだ！　そうやって、俺を突き放して、やっ
と近づけたと思って、置いて行かれるおれの気持ちはどうなるん
だっ」

普段は声を荒げることも本当に少ない、と言うより無いに等しい
ミーが、興奮したらしく背後から伸ばしてきた両手で俺の顔をぐわ
しっと掴み、文字通りゴキッといきそうなほど無理やり首の向きを
自分の方に引っ張る。

「……っ」

「俺は、どうなるんだ！」

ぎゃー……ミー……俺の首を見て？！　お前がどうなるかより、今
は俺の首……痛い痛い痛いっお、折れたかも……？

涙のミィ×心配な俺の首（後書き）

感想お待ちします!!

女神の微笑み×片想い終了？

「……っ」

まずい、今変な声を出すわけには行かない。俺にだってそれくらいのプライドは……まあ多分、存在してると思うし！！

「ソウ、俺は、どうしたら良い？どうすれば」

「……み、ミー」

とりあえず、この空気を壊さないようにそっとミーの手を外し、優しく優しく名を呼んで

「俺、ずるかったな……ミーに全部言わせようとして」

まあ、そうだよな。自分の気持ちはもう生まれたての新生児室の頃から揺らいでないとは言え、ミーは最近恋心に気づいたまだ青春真っ盛りの中学生なわけで……

「ソウ……？」

ミーの顔を正面から真っ直ぐ見つめて、小心者の俺は慎重に言葉を選び、問いかけた。

「なあ、俺が……幼馴染じゃなくなったら駄目かな？もし、幼馴染でも、親友でも、なくなつて、もっと近い所に居たいって言つたら、ミーは……国光はどう思う？」

ミーは、眼鏡で隠れた幼い頃と変わらない大きな瞳を涙で潤ませ
て、俺の話をじっと聞いていた。でも、じわじわと盛り上がりゆら
ゆらと揺れていたその涙は、俺が生まれて初めて、国光、と名を呼
んだ瞬間……滴に変わり、そのつるんとした綺麗な顔の表面を零れ
落ち

「……おれは、ずっと、ソウはおれのほんとうのなをしらないの
だと、おもっていた。しっていたんだな……薔薇^{そうび}」

そう言ったミーは、驚くほど、本当に息が止まるほど美しく……
微笑んだ。

「……つく」

うわぁ……可愛い！！て言うか女神？！俺、完全に惚れ直した！！

「ソウ、俺もお前と……もっと近くに居たいと思う」

ひゅつと、息をのみ……俺は全身真っ赤に染まった。と思ったら
目の前にいるミーも全身ピンク色に……

「……あ、えと、なあ、とりあえず部屋入っても良いかな」

うがぁー！！他に何を言えと？！恋愛スキル低すぎてもうどうした
ら良いやら……うぉぁー！！誰か助けて！！

「ああ、そうだったな」

なんて心で叫んでも誰かが助けてくれるはずもなく。
俺とミーは連れだって部屋の中に……って断じて邪な考えではな

いぞー！！

「そこに座れ」

いつものように、俺専用のふかふかクッションを背に座り、ミーも自分の定位置である正面に腰掛ける。

「あぁっと、なぁ、さっきの……あれさ、取り消すなら今のうちだぞ？本当に、本当に良いのか？」

もしこれが白昼夢とかだったら、とか、ミーの気が変わって気持ち悪いつて言われたらどうしようとか、疑い出せば限が無い事を脳内でループさせながら、一応の最終確認を。

「あぁ、男に二言は無い」

……あ、そうですか。何とも男らしい一言に、何となくぽおっとする俺。

「あ、でもやっぱり一発殴って！！夢だったとき目が覚めたら恥ずかしいし！！」

俺は真剣に、それこそ真顔で、渋るミーに頼み込み、その結果。

「ぐおっ！！」

愛の籠った拳に吹っ飛ばされ、そのままぶつかった拍子に倒れた本棚から落ちる大量の厚い本に埋もれて、酷い痛みを感じた俺の脳内にはその瞬間カラフルな花畑が咲き誇り、ぱんぱかぱーん！！とファンファーレが鳴り響いた。

「ゆめじゃ、なかった……」

そして俺は、この幸福を味わう余裕もないまま、倒れた本棚と散らばった本を元通りにするまでは口を利かないとミーに叱られて長い時間をついやすことになるのでした……あれ？俺たち、付き合うつてことで良いのかな？

女神の微笑み×片想い終了？（後書き）

さて、主人公の長かった片思いもついに終了し、これからは恋愛初心者の二人らしく初々しいお付き合いを始める予定でございます。ここまで読んで頂きまして本当にありがとうございます。これからも気長に楽しんでいただければ嬉しいです。

視線の攻防×ミ一の唇（前書き）

すみません！！片想いは終了しましたが、そこまで進みません。
2人はまだミ一の部屋にいます。

視線の攻防×ミーの唇

「ミー？なあ……まだ拗ねてんのか？」

自分から頼んだとは言え、強烈な愛の拳を受け倒れた俺は……結果あいつが長年コソコソとコンプリートしてきた大事な洋・和・古の書物を、これまた立派な本棚ごとなぎ倒してミーを怒らせてしまった。

「……ソウが悪い」

まあ、本棚も大事な本も元通りにきっちり片づけたんだけど……ミーはむつつりと黙り込んでこちらを背に座り込んでいる。

ミーの本好きにも困ったもんだよなあ。お年玉もお小遣いも使い道はテニス用品か本か、使い道なんていつもそんなもので、俺なんか、これまで何度新しくできた本屋とかスポーツショップに付き合わされたか覚えてないくらいだし。

「そうだなあ、俺が悪い。ごめん」

ミーの部屋の、図書館並みにきっちりとア行から並べられた古めかしい本を見るたびに、いつもいつも俺は思っていた。こいつらは良いなあ、こんなにも愛されて、大事にされて……ミーの休日には天日干しされて、傷がつけば補修も施され、甲斐甲斐しく世話を焼かれる本に、俺は嫉妬さえしていた。

……けれど、今日からは違う。本にだって自慢したい！本よ！今日からミーの一番は俺なんだぞ！！」と。

「……何を笑っているんだ？」

「え？」

ミーに指摘されて、はっとその背中を見れば、窓越しに合う俺たちの視線。……ん？おかしいぞ？何度見ても、瞬きしても、そこに映るのはミーの拗ねて細められた可愛い瞳と、いつもは平凡なのに、現在は幸せでゆるゆるになった俺のキモイ表情。

「ソウ、本当に、しっかり反省しているのか」

そう声は聞こえても、まったくこちらを向く様子が微塵も感じられないミー。

「反省してます！！本気で悪いと思ってます！！ごめんなさい！！」

頭は下げるも、表情が謝っていない俺。

「……」

「……」

背を向けたまま窓際に下がるミー。

じりじりと膝を擦り、四つん這いで迫る俺。

「……」

「……」

窓越しに合った瞳はお互いに外さず、視線の攻防戦は続き……。

俺はついに！窓際の隅へとミーを追い込んだ。

「なあ、いい加減こっち見たら？」

「……反省しているのか？」

はあ……。

久しぶりにこんなに近くでミーの頭の天辺見たかも、とか考えながら、幼い頃よりは少し傷んだけど、でもやっぱりこのくるくるとふわふわ感は変わらないなあと栗色の髪を梳いて、俺と比べると少しまるい耳をつうつと撫でて、囁いた。

「はんせいしてる、だから……こっちむいてよ」

「っ……そっ」

そして、驚いて振り向いたミーのつやつやした鮮やかな紅い唇をかぶつ、と頂きました。

付き合つと決まったのはついさっきなのに、片恋期間が長すぎて、今まで我慢して必要以上に触れずにいたせいか……二人きりの部屋で、久しぶりにミーの髪へ触れて、あの柔らかな耳を撫でて、そしてつるりとした横顔を見た俺は

「っうふっ」

「っ……」

窓際にいたせいか、ひやりと少し冷たくて、柔らかくて、美味し
いその唇をぺろりと舐め、食みながら、凄く近い所にいる最愛の人
を見つめる。

あ、真っ赤。

「みい、はなで、いき……して」

「つむうつ」

そうだよ、何か変だと思ったら、ミーってば息してなかったんだ。なんて、のほほんと恋人の赤い唇をいつまでも食^はむ俺に、その時は来た。

「つぐ、離れる馬鹿者!!」

「うわっ!？」

恥ずかしがるミーに突き飛ばされ、ごろんと転がった俺は勢いよく床に頭部を強打し……気絶した。

「おいっ?!う、そう?……」

なんか、遠くから、ミーの焦った声が聞こえるけど、瞼を閉じる瞬間に見えたのが紅色ほっぺの可愛い顔だったから、まあ良し!!

視線の攻防×ミイの唇（後書き）

感想お待ちしています。

閑話

「ねえ、乾？」

屋上へと続く階段途中、不意に問いかける成長途中の柔らかな声

「……何だ、不二」

そしてまた、その声に答える男の子が一人。

「……手塚と寿、大丈夫かな？」

「……手塚の怪我なら、発見と応急処置が早かった事が幸いして悪い様にはならないらしい。ただ、寿は……暴力沙汰だからな」

はあ、と2人は同時に重いため息を吐き

「あの時、僕は何にも出来なかったなあ。先輩を止めることも、手塚を助けることも、先生を呼ぶことも、……寿にしがみ付いても、結局ふり払われて」

まるで少女のような可愛らしい少年は、俯きか細い声で

「そんなもの、俺も、菊丸も大石も同じだ。振り払われて、あげく手塚を保健室へ運ぶこともせずに騒ぐだけで」

細眼鏡をかけた長身の男の子は、広げていたノートを閉じ。
ぺた、ぺた、と上履きで階段を上がりながら、昨日の出来事で多

少々なりともショックを受けた彼らの話す声音は暗い。

「手塚は被害者だけど、寿は……演劇部へ入部したばかりだったのに」

「多分、退部させられるだろうな。停学も、親御さんや手塚とその祖父およびご両親、そして俺たちの抗議によって短くはなったが……人の噂も八十五日」

「学内中、学年を問わず今回のことを話題にして面白がっている風だし。きっと、停学があけても寿、学校に来づらいんじゃないかな？」

少女のような不二周助が普段決して崩すことのなかった笑顔を崩し、弱ったように眉を下げた瞬間。まるで待っていたかのように、にやりと細眼鏡男子こと乾貞治が不敵な笑みを見せ

「それはないだろうな。やっと思いが通じた恋人をあの寿が一人にすると思うのか？　しかも手塚は今怪我を負っていて片手が使えないんだ。たとえ演劇部を退部させられようと文句一つ言わないだろう確率99パーセント」

ずるつと足を滑らせた不二の背中を支え、乾はきつぱりとその確率まで言い放つ。

「ええっ？　何時の間に付き合うことになったの？……手塚なんて恋のコの字だって知らないみたいだったのになあ。僕は、最低でも卒業するまでは進展なんてないと思ってたのに。それで？　確率の残り1パーセントはどういうこと？」

ぱつと体勢を整えるとそのまま振り向き、先ほどの暗さはどこへ吹き飛んだのかと思うほど面白そうな顔で乾へ問う

「手塚が寿の退部について、いつまでも気にする確率は100パーセントだ。つまりその手塚に」

「寿は怒りはしなくても、意地悪はするかも？」

「そのとおり……」

その時、がちやり、と屋上の扉は突如として開かれ子猫が一匹飛び降りてきた。眩しい光を浴び、元気な子猫を受け止めた二人は、今までのお話しなどなかったかのように

「英二つたら、階段から飛び降りちゃダメだろ？」

「でもでもっ二人とも遅すぎだにゃ！！お昼休み終わっちゃうにゃー」

不二は、本物の子猫の様にぴょんぴょん跳ねながら二人の背中を押す菊丸を宥め

「……屋上に広げられたままの菊丸の昼食がカラスに盗まれる確率75パーセント」

乾は静かに脅し。

「にゃー！！？おーいしー！！お弁当もってくれにゃー！！」

「エイジ！お弁当を広げるのは全員が集まってからって言っただ

ろう!？」

屋上の扉から首だけだし叱る大石に、三人に注意を受けしょんぼりと垂れる猫耳が目につかぶ菊丸。

恋愛事情を知る二人も知らぬ二人も、どちらにしろ、これから先必ずこの場所へ戻ってくる二人を信じ、今までと同じ日常を、今までと同じ騒がしさなまま、待っています。

春の終わり×病院

「ソウ……俺の記憶違いでなければ、お前はまだ停学期間があげていない筈だが？」

頭部強打により気絶した昨日の事はとりあえず置いて……翌日の朝。

さくさくと、桜の散った薄桃色の残る道を進む俺とミー。足元を見れば、落ちて踏まれたらしい花卉が地面に無数に広がって春の終わりを告げていた。

「記憶違いじゃないけど、だからって怪我してるミーを一人で病院へ行かせるつもりはない」

そう告げて俺はふんつと鼻を鳴らす。

今日はミーの通院日なのに、ミーママは俺の母さんと約束していたショッピングへと楽しそうに出かけて行っただし、ミーパパと父さんは仕事、ミーの爺様は知り合いと将棋を打ちに出かけた。可愛い可愛いミーの怪我也治ってないのに！信じられん！！

と言うことで、唯一残っていた俺が自分自身の安心の為にいついに行くことにしたわけだ。

「……ソウ、もし学校関係者にでも見られてしまったらどうするつもりだ？」

むしろ俺は片手の使えないミーに何かあったらと考えた方が怖いので学校関係者なんてどうでも良い。

と言うか、ミーはどこから飛んできたのか分からない桃色の花卉

を栗色のふわふわした髪にのせて心配げに周囲を見渡したりいていて……可愛すぎるっ！！俺の身の心配までしてくれてるし！！

「ああもうっ！！俺のミーはなんて可愛いんだ！！」

もう片想いじゃないと思うと我慢できなくて思いつきり抱きしめてしまった。あ、もちろんちゃんと怪我をしている手は避けてますよ？

「っ馬鹿者！此処をどこだと思っているんだ？！」

げっ！！そう言えば昨日も特攻して失敗したんだった。と今更ながらに昨日打ってまだ微かに痛む頭部を思い出したけどもう遅いみたいだ。

「おっと」

突き飛ばされたあげく、危なく電柱に打つかって昨日の二の舞になるところだったぜ！！しかし俺はひらりと背後にそびえたつ電柱をかわし、ミーの正面へ躍り出た。

「……ミーは俺と行くの、嫌か？」

「……別に嫌とは、言っていないだろう」

さっきとは打って変わって、俯き小さくつぶやくミーのかわゆいことっ！！幸せすぎて思わず鼻歌歌っちゃうぜ！！

「あ、見るよミー」

心の中でふんふんと鼻歌を歌いながらミーの隣を歩いていると、目の前の交差点を不二君に似た少年がランドセルを背負って歩いているのが見え思わず声を上げてしまった。

「あれ、不二君の……家族？」

「確か不二には弟がいると聞いたことがあるが……」

顔立ちは似ているものの、良く見れば髪は短髪で女の子っぽくはない。ふうん……弟ねえ？

「その辺の子達と並んだら目立つだろうに……不二君と比べると結構普通だな」

ある意味可哀想かもしれないな。典型的な出来る兄と平凡な弟の図か……いつか話をする機会があったらいろいろアドバイスしてやりたいような、正直なところミー以外はどうしても良いような。

「……そういうことは心で思っても口に出すべきではない」

「あ、ごめん」

なんて話している間にミーの罹りつけの病院へ到着。まあ、何気に俺も小さい時から何かあればここに來ていたからお医者さんの先生とも看護師さんとも十数年来の顔見知りなんだけど。

「あ、スロープ付いたんだ？」

ここ数年は無病無怪我のおかげでここに来るのは久しぶりだったせいか、入り口の真新しいスロープに少し驚いた。

「ああ、近所の斉藤さん宅のお婆さんが腰を痛めて車いす使用になったのがきっかけらしい。最近は少子高齢化が進んでいるとあって元々スロープを付ける話は上がっていたそうだ」

緩やかな傾斜で作られたスロープを見て真剣に話す中一が2人……。

「……あ、予約の時間だ」

シニールな場面を想像してしまった俺は、白々しくもぼそりと声を出して病院の自動ドアのボタンとミーの背を押し受付まで急ぐ。

「あら。こんにちわ、手塚君」

昔から変わらぬ姿でそこに座る受付のお姉さんは背後の俺に気が付くことなく、目の前に来たミーへ声をかけた。

「先日は失礼しました。今日は通院で……」

「本当に、この間は驚かされたわ。まさか手塚君が喧嘩とは思われないじゃない？ 寿さん家の薔薇君ならともかく、手塚君がねえ？ ……あら、もしかしてそこにいるのは」

頼杖をついてミーと話すお姉さんとその内容に、やはり小さい頃から通っているだけはあるなあと思いつつ咳払いを一つ。

「寿さん家の薔薇君です！ お久しぶりですお姉さん！」

ミーの首元から顔だけ出して挨拶した俺にお姉さんはため息を一

っ。

「ふうん？相変わらず、手塚君一筋って感じねえ？まあ良いわ、とりあえず診察券と保険証をお願いします」

両手を差し出しそう告げたお姉さんへ素直にブツを手渡すミー。

「宜しく頼みます」

「手塚君、貴方は年々お爺さんに似ていくわね？本当に中学生？」
本気で残念だと言う感じの顔でミーを見つめ、とても失礼な発言をしたお姉さんへ俺から一言。

「俺たちがオムツしてた頃からそこに座って受付のお姉さんしてるくせに何言ってるんですか？」

「……良い度胸ね？手塚君にアノコト、知られてもいいのかなあ？」

ばちばちつと火花が飛び散る俺とお姉さんの視線を、不意にミーが遮ると

「その、アノコトについては帰宅後にじっくり話を聞くことにする。そのために早く診察を頼みたいのだが……」

……あ、そうでした。っていうかアノコトってどのこと？！秘密じゃないけど、ミーに話してないことは実は結構あるからなあ。

「そうだったわね。あ、今日は空いてるからもう診察室へ入って

いいわよ」

ええっ！？お姉さん適當すぎねえ？と、内心は思いつつも取りあえずその真っ白な診察室のドアを引き、自然に入室する俺とミィ。

「はい、こんにちわ。国光君、今日の調子はどうかな？」

回るイスを回転させてくるりとこちらを向きゆったりと声をかけてきたのは、御年六十を少し過ぎたちっちゃなお爺さん先生。年の割に、よぼよぼで背中も曲がりその影響でとっても小さな妖精さんみたいな外見だけど経験豊富で物腰も優しく腕も良いので近所に留まらず、遠方からも患者がやってくる隠れた名医なのである。

「先日は突然、失礼しました」

「国光君、怪我や病気とは誰にも突然訪れるものだよ」

「……そう、ですね」

「そうとも。それじゃあ、腕を出してくれるかい？」

真っ白い診察室の壁に貼られた検診がいかに大事か事細かに記述されたポスターを熱く見つめて二人の会話を聞き流す憶病な俺。とてもじゃないけど、ミィの腫れあがった腕を直視する度胸は無い。ごそごそと物音が響く中、俯きついでに瞼を閉じて、無心になります。

「あれ？そういえば薔薇君も来てたんだねえ？どこか痛くしたのかい？」

「……壁を見たままですんません。ええと怪我とか病気とか別にしてないです。ただ、ミーが心配で」

「ふむ……大丈夫、これなら普段の生活には支障ないと思うよ」

……えっ?! それってスポーツは、テニスはどうなの?!

聞いていた話と違うことに気づいて、一瞬にして肝が冷え、頭が真っ白になった俺は……

春の終わり×病院（後書き）

こっそりと不二裕太君が登場しました。結構先の話になりますが、また登場する予定でございます。お楽しみにして頂ければ幸いです。ございます。

心の傷×無言のお茶会（前書き）

約一か月も放置してしまい申し訳ございませんでした。

また細々と更新していきますので、楽しんでいただければ幸いです。

心の傷×無言のお茶会

「え？……て、にすは？」

「ううん、テニスは難しいかもしれないねえ。専門の医師を見つけて、治療を受けて、リハビリをして……」

そんな答えが欲しかったわけじゃないんだ、違う、違う、違うっ！父さんも母さんも、治るって、そう言っていただろう？

俺は先生へ掴みかかり、縋り付いて、祈った。

「先生は腕がいいんだろう？！遠方からも患者が来てるんじゃないのかよ！！なんでっ治してくれないんだ……」

なんでそんなこと言うんだ。どうして難しい？！そんな、だって、どういう事だよ！！

「ソウ、ソウ落ち着け！……良いんだ！今日は、先生に専門病院を紹介して頂くつもりで来た。だから」

だから良いんだ。ミーは妙に落ち着いた口調で、俺の目を見てそう言った。

気が付けば、俺は小さな御爺さん先生の小さな膝へ縋り付いて泣いていた。

……そう、分かってはいたんだ。あのテニスコートで、妙に耳に残るあの嫌な音を聞いた時、そんなに軽い怪我じゃすまないことは、気づいていた。

「……それでも、俺は、お前に、テニスを諦めて欲しくない」

「ああ、俺も諦めるつもりはない」

俯いて、御爺さん先生の真っ白な白衣へ、透明な滴を零す俺に、お爺さん先生はいつも通りの調子で

「……大丈夫、大丈夫だよ」

そう声をかけ、優しく、その小さいけれど皺の入った柔らかな暖かい手で、頭を撫でてくれた。

――

「……なあミィ、ちょっとお茶して行かないか？」

病院帰り、自宅へと続く道を歩きながら、俺はミィへそう声をかけた。

「ああ……そうだな」

行きと帰りで違うのは、俺たちの距離。

手を繋ぐには遠くて、他人と勘違いするには近い、微妙なその間隔を空けたまま、俺たちは歩いた。

「ちりん、と店内へ響くのはドアベル。……ここは近所のダンディなオッサンと柔らかな笑顔が微笑ましいふくよかな奥様がやっている私立図書館と隣接した小さなカフェ。」

「……」

「……」

向かい合い、カフェオレを飲み続ける俺たちを、静かに見守る二対の瞳。

「ねえね？2人とも、喧嘩でもしたのあ？」

ふくよかな奥様が、穏やかな口調で俺たちのテーブルへ声をかけ

……

「おい止めておけ。思春期の青少年たちに余計な口出しは無用だ。」

拳を合わせりやすぐに元に戻るさ」

ダンディなオッサンは全てわかってますって顔で奥様を止めに入り……

「……」

「……」

俺たちは、話したいことは沢山あるのに……何から言えばいいのかわからない。

ああ、どうしたもんかね？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8714w/>

おれ×てんせい×てにぷり

2012年1月8日19時48分発行